

10月29日、パキスタン・イスラム共和国西部パルチスタン州で死者約270人、被災者約6万8200人の地震が発生した。

地震発生の情報を得て、AMD Aパキスタン、アフガニスタン両支部に、医療チーム派遣の要請をした。パキスタン支部からは、「危険地域だから調査検討する時間がほしい」と返事が来た。アフガニスタン支部からは3日後、連絡があった。

「10月30日にカフルで自爆テロがあり、支部のカフル事務所の窓ガラスが割れるなど被害が発生し、後始末をしていない。アフガニスタン支部は積極的に医療チームを派遣する準備を進めている」

11月9日、パキスタン支部から連絡が入った。「外科医4人、運転手2人の医療チームをクエツ

タに派遣した。アフガニスタン支部に引継ぎ後、撤収予定である。それまで活動する」と。アフガニスタン支部も「医師ら3人の医療チームをカンダハルからクエツタに派遣して、パキスタン支部のチームに合流したい」という。

私もアフガニスタン支部長ラヒミ医師に電話で感謝の意を伝えた。「本部はアフガニスタン支部の救援活動に最大限の支援をしたい」

AMD Aは98年から00年まで、北西辺境州ペシヤワール市近郊のジハッド・ケリー難民キャンプなどで医療救援事業を実施した。また、01年11月より07年2月まで、パルチスタン州クエツタ近郊のアフガン難民キャンプで医療救援活動を継続、16万人以上のアフガン難民を対象にした医療事業を運営してきた。

パルチスタン州は、アフガニスタンと同じく伝統的な血縁共同体社会である。その血縁共同体社会には3種類の間関係

AMD Aパキスタン支部・アフガニスタン支部の救援医療活動

しかない。身内、友人、そして敵か他人である。アフガニスタンのカル身内以外の人間関係のために、銃の引き金は引かない。クエツタから被災地の部族はパシュトゥーン族である。アフガン支部もパシュトゥーン族である。アフガン支部となってきたのは、「アフガン保健・開発サービス(AHDS)」というロカルNGOである。AMD Aのクエツタにおけるプロジェクトの良きパートナーだった。

昨年11月にインド・ニューデリーで開催されたAMD A国際会議に参加して、今年7月、正式にAMD Aアフガニスタン支部として認められた。AMD Aパキスタン支部は、主としてパンジャブ人である。パシュトゥーン族のアフガン支部との協力なくしては被災地での救援医療活動は不可能だった。パシュトゥーン族には、彼ら独自の社会の慣習がある。掟の社会である。「掟破り」は死を意味する。パキスタン支部が救援活動をためら

った最大の理由である。アフガニスタンのカルザイ政権はパシュトゥーン族を主体とするタリバンとの和平推進を望んでいる。98年、AMD Aは当時のタリバン公共福祉大臣アッバース氏と北部同盟のアブドゥラ外務副大臣を岡山に招いて、「アフガニスタンのすべての子どもたちがワクチン接種を終えるまで、戦闘行為を中止すること」を目的とした、ワクチン停戦の協定を実施した実績がある。

アフガニスタンは79年から旧ソ連による軍事侵攻を受け、その後内紛が続いたが、02年には、アフガニスタン復興支援国際会議が東京で開催された。再び、和平が確立すれば復興支援への活動にNGOの参加が期待される。近い将来、AMD Aがアフガニスタンの人たちの役に立てる時には、AMD Aアフガニスタン支部が大きな役割を果たしてくれると期待している。

(AMD Aグループ代表)